

神奈川支部情報

第11号 発行日 2009年6月15日

<発行者>撫順の奇蹟を受け継ぐ会神奈川支部

<連絡先> 松山英司 TEL/FAX 046(871)4263

e-mail kan.mat.hid@tbc.t-com.ne.jp

郵便振込口座 00190-2-114578

第6回神奈川証言集会 (09年5月30日・かながわ県民センター)

金子安次さん (89才・元中国帰還者連絡会会員)証言特集

今回は金子安次さんに無理をお願いして横浜まで来ていただき、証言をしていただきました。金子さんは、「奪い尽くし、焼きつくし、殺し尽くす」という三光作戦のあらゆる場面を体験されています。戦後、シベリアへ5年間抑留されて、さらに6年間の中国撫順戦犯管理所で、中国側の人道的な待遇の中でようやく反省の道を歩みはじめました。

しかし、本当に心からの反省に至ったのは帰国してからだ、と金子さんは証言されています。帰国後、結婚して子どもが生まれて、自分の子どもの顔を見て「あのとき、中国人の子どもを・・・!!」と思いださずにはいられなかった、と言います。金子さんは「侵略戦争ではなかった」という田茂神論文に対して、「私が事実を証明しているのだ!」と怒りを込めて抗議されていました。

証言集会第2部では「歴史事実と歴史認識の挟間で；タモガミはなぜもてる?!」と題して、姫田光義さん(中央大学名誉教授)に講演していただきました。次号情報で報告します。

私は「三光作戦」のすべてを体験した

人を殺すことはどんなに怖いことか

私は幼いときからの教育で、忠君愛国の信念が頭にこびりついていました。「一太郎やあい」という本がありました。それは日露戦争当時の話で、一太郎という青年が出征のときに、おふくろさんが見送りにきて叫んだ。「一太郎やあい!お前、戦地へ行ったなら天皇陛下のために一生懸命に働くのだよ!」と。(叫んだ母親の像は、現在も香川県多度津町の桃陵公園のシンボルとなっています)私はその軍国美談の精神が頭の中にこびりついていました。

そして昭和15年11月3日にいよいよ招集されて、東京の上野公園に集合しました。その2日前におふくろと会いました。私はおふくろに言いました。「俺はよう、戦地へ行ったら必ず上等兵になって帰ってくるからなあ」と。当時の私たちは、上等兵になることは最高の誇りだったのです。そう言えばおふくろは喜んでくれるだろうと思った。おふくろはしばらく考えていましたが、そのうちに口を開きました。「おっかあはなあ、勲章はいらない、生きて帰ってこい」と言ったのです。そこで私はうちのおふくろはなんだい、こんなことを言いやがってと軽蔑しました。

このような精神で軍隊に入りました。上野公園に集合して、港まで歩いて船で

中国山東省の青島に上陸しました。青島から貨車に乗って降りたところが徐州の少し手前のエイジというところでした。そこで私は3か月の訓練を受けました。私が指定されたのは重機関銃の科目でした。

部隊では馬も飼っていました。ある日、馬の手入れをしていました。馬に足を上げさせようとしても、馬のほうが初年兵をなめているのです。絶対に足を上げないのです。逆に足を突っ張らせているのです。そこでコノヤロウ、とと思って手でひっぱたきました。それをどこかで見ていた獣医官が飛んできて「貴様、軍馬を殴ったな！」と、私は馬の顔を一回しか殴らないのに私は5回も殴られました。その上、「いいか！貴様らは赤紙一枚で何人でも集められるんだ、馬はそうはいかないんだ、貴様らは消耗品なのだぞ！」と、こう言われました。私ら兵隊は消耗品だったのでした。

そういう意識はなかったのですが、いよいよ訓練が終わって第1回目の作戦がその年の暮に始まりました。「教育作戦」と言われて、古い兵隊と一緒に行動を開始したのです。ある部落に入りました。すると突然、古い兵隊たちは一斉に散って部落へ入っていったのです。しばらくすると「初年兵全員集合！」の命令で集合しました。初年兵が連れられたところは林の中だった。立木に中国人の農民が縛られていました。初年兵に向かって、「剣を着け！」と古い兵隊から命令されて私たちは剣を抜いて銃につけました。そして初年兵は命令に従って一列横隊に並びました。

「いいか！号令に基づいて走って行って、あの中国人を殺せ！」と命令されました。号令されて1番目、2番目と出て行きました。私は3番目か4番目だったと思う。「ヤー！」と声を出して突進しました。ところが、人を殺すということはこんな怖いことはありません。心臓ははちきれんばかりに波打ちます。1対1の戦いならば、相手を殺さなければ自分がやられてしまうのです。ところが相手は木に縛られているのです。それを殺すということは大変なことなのです。

私の順番になった。号令に従って、縛られている中国人に向かって夢中で胸を刺しました。ところが力が入らないのです。手が滑って銃が落ちたのです。すると古い兵隊たちから怒号が飛んできます。「このバカモノッ！」と3、4回ぶっ叩かれます。「もう一回！」「もう一回！」と号令をかけられるのですが、何回突いても剣先は入っていきません。肋骨につっかえて入らないのです。そして手が滑ってしまうのです。

そのうち古い兵隊が「俺が見本を示すから見ておれ！」と言って、銃剣を着けて「ヤーッ！」と突進した。中国人の目の前でいったん止まって、剣先を横にしたのです。ろっ骨の間にスッと入ったのです。

そして「いいか、この通りにやれ！」と言いました。自分もその通りにしました。スーッと入っていったのです。一人の中国人に対して10数人の初年兵が一斉に突いたのです。傷だらけで、瀕死の状態でした。私たちの突き方ではなかなか心臓まで届かないのです。再び古い兵隊は「心臓はいいから、腹でもどこでも刺せ！」と命令するのです。腹を刺しました。その中国人はガクッとなって死にました。

こうして私達は人を殺す訓練をされました。これが当時の日本軍の実地訓練だっ

たんです。怖かったですよ、人を殺すということは！・・・ぶるぶると手が震えます。相手は縛られていて抵抗も何もできないのですが、とにかく人を殺すということはこんなに恐ろしいものだとは思わなかったのです。

2、3年も経つと！

ところがこれが、2年、3年と経ってくると人を殺すことが面白くなってきます。「ようし、あのチャンコロを殺してしまえ！」と人を殺すことが面白くなってきます。首を切ったり、腹を刺したりするのです。だんだんに私達兵隊は鬼になっていくのです。だから中国の人たちは私たちのことをリーベンクイズ（＝日本鬼子）と言っているのです。その通りなのです。鬼になってしまったのです。人を殺す事が平気になってしまっているのです。このように私達は人を殺す訓練をみっちりさせられたのです。これが当時の日本の軍隊の姿であったのです。

私がここで一番腹が立つのは、最近出ました田母神の論文を読んだときです。私はカーッときました。「日本は侵略国家ではなかった」「その様なことは濡れ衣である」ということに。とんでもない！私達が中国で何をやったのか。これから私はその話をします。

部落掃蕩一女を井戸へ

大隊本部にある部落には八路軍が進入した、との情報で「第一中隊と第二中隊は直ちに出勤、攻撃せよ！」との命令が下りました。私は第一中隊に所属していました。第一中隊が東側から、第二中隊は西側から、と挟み撃ち作戦で部落を包囲しました。深夜12時ころ攻撃を開始して、明け方にその部落に到達しました。ところが八路軍の抵抗は激しかった。なかなか部落に突入ができずに、朝までかかってようやく八路軍の半分以上を斃したのです。部落に突入して部落掃蕩を始めて、残った残兵を捕まえていました。

必ず古い兵隊と初年兵が組になって部落内を点検するのです。私と古い兵隊がある家屋に入りました。多くの中国の家屋は窓が一つしかないのです。暗くて中の様子がわかりません。集中して目を凝らすと、少しずつ中の様子がわかってきました。奥の方にオンドルがあります。暖房装置です。彼らはその前で寝ているのです。よく見ると、そこに女の人が子供を抱いてジーっとしているのです。すると古い兵隊は、「金子、お前はこのガキを連れて表へ行っている！」と命令するのです。「俺が終わったら、おまえにさせるから・・・」と言われるままに、泣く子供を無理やり抱いて表へ出ました。すると家の中から女の悲鳴や泣き声が聞こえてきます。「コノヤロー！」「バカモノ！」とか古い兵隊の怒鳴り声も聞こえてきます。

しばらく怒鳴り声が聞こえていたが、そのうちにその古い兵隊が女の人の髪の毛をつかんで表に出てきました。「ふざけたアマだ！お前、着いてこい」と私に指示してその女性を引きずって歩き始めました。中国の部落には必ずいくつかの共同井

戸があります。そのうちの一つにその女の人をつれて行きました。女性は一生懸命抵抗します。そこで「お前は足を持って」と命令されて、二人で持ち上げて「イチ、ニのサン」でその女性を井戸にドボンと放りこんだのです。

そのとき私は子供のことは、すっかりと忘れていました。その子供は母親が井戸に放りこまれてしまったのを見ていたのでしょうか。その子供は「マーマ！マーマ！」と泣きながら井戸の周りをぐるぐる回っていました。子供は小さくて井戸の縁に手が届かないのです。そのうちに自分の家に戻って、小さな台を持ってきました。台に乗って「マーマ！」と叫びながら自分で井戸の中に飛び込んでしまったのです。

私はそれを見てゾッとしました。子供にとって女親がどれほど大切なものか、ということをやまやまに見ました。古い兵隊も、一瞬シーンとしましたが「金子、かわいそうだから手榴弾をぶち込んで楽にしてやれ」と言うのです。私たちは腰に手榴弾を二個装備しています。一発は相手への攻撃用で、一発は自爆用です。その一発を外して発火させて井戸に放りこみました。このときのことは今もって私の頭の中にこびりついて 있습니다。子供にとって女親はこんなにも大切なものか、・・・思い出すたびに今も寝苦しくなるのです。

このようにして私たち日本の軍隊が行ったことは、しかしこれはほんの序の口にすぎないのです。こんなことを私たちは何回となく行ってきたのです。これが侵略でなくて何でしょうか。たしかの私たちは強姦もやった。人殺しもやった。しかも平気でやってきた。初めのうちはたしかに怖かった。二年、三年と経験するうちに私たちは鬼になってしまったのです。

このようにして日本の軍隊は兵隊を鍛えていきました。私はその通りに鍛えられてしまいました。このことが天皇陛下のためであり、忠義であると、またこれが親孝行であると私たちは思っていました。こうして私たちは二年、三年とそのような行動を重ねて参りました。

司会：金子さんのお話はまだまだ続きますが、少々お疲れのようですので一段落しながら考えてみたいと思います。金子さんは「殺すことが面白くなってきた」と仰いました。もちろん私たちはそれを実感することはできません。このことを侵略という事実と結んで、しっかりと認識しておかないと田茂神の言う論理にごまかされてしまうのだなあ、と思います。また続きを話していただきます。

私の体験はほんの一部でしかない！

中隊長から次のような命令があるのです。「女は殺せ！」と。なぜ女を殺すのか。女は子供を産むからです。一方日本では当時、「産めや、増やせや」の運動をやっていました。子供を10人以上産んだ親は国から表彰されていました。それが戦地ではその子供も殺してしまえ、というのです。なぜならば、子供は大きくなったら反抗するからだというのです。「女は殺せ、子供も殺せ」と、じっさいにこのような指示が私たち兵隊にあったのです。そのことで私たちは必死だったのです。

母子を井戸で殺したあとで、私たちは部落を見回りながら集合場所へ行きました。そこには部落民が集められて後ろ手に縛られて座っていました。そこに将校が立っていました。古い兵隊が説明しました。「あれはな、あの人たちの首を切るのだぞ」と「お前は初めてだろう、よく見ておれよ」と。そのうち将校が刀を抜きました。

年寄りのその部落民は、あとで聞くとところによるとその村の村長だったのです。その村長を前屈みに座らせて、小隊長は刀を振りかざして構えました。ダーッと切りました。ところが運がいいのか悪いのか、刀がポキッと折れてしまいました。その瞬間、小隊長は顔色が真っ青になってしまいました。それを見た中隊長がニタッと笑って「しょうがないな、俺の刀を使え！」と自分の刀を渡しました。「もう一回やれ！」と。兵隊たちが大勢見ている前で、まさか首を切れなかったとなったらいい笑いものになります。志気に影響するという考えがあったのでしょうか。小隊長はもう一度構えて、ズバッと刀を振り下ろしました。今度はもろにスパッと切れて首がころころと転がったのです。首の切り口から血がドバッと出て、身体が前へばたっと倒れました。周りで見っていた老婆が、ワーッと泣きながらその首を拾って抱きしめたのです。血で真っ赤です。自分の夫だったのです。このようにして私たちは必ず、将校は将校で刀を持っているから首を切る算段をする。私たち兵隊は兵隊で「度胸試し」だといって、銃剣で刺し殺す算段をする。これが、私たち日本軍隊が中国で行ったことのほんの一例にすぎないのです。まだまだあるのです。

司会：金子さんが仰るように、ほんの一部の事実です。金子さんが経験されたことの中でもほんの一部です。したがって200万人もの日本の軍隊が中国でどれだけのことをしてきたのでしょうか。空恐ろしい限りです。

このようなことがあまりにも知らなさすぎるし、田茂神論文のように「あれは侵略ではなかった」という主張がまかり通っています。それが「社会の常識」であるかのようにされようとしていますし、政治もそのことを前提に回っています。そのような社会になっています。金子さんの貴重なお話しをもっともっと大勢の人に聞いてもらいたいと考えています。もう少し話を続けていただきます。

兵隊は単なるモノにすぎない！

今度は日本の兵隊が死んだときの状況を話してみます。兵隊とはいったいなんでしょうか。紙一枚で私たちは招集されたのです。兵隊とは戦うためのモノであり、死んでいくモノです。兵隊とは軍隊の中での一つの道具にしかすぎません。死のうが生きようが、そんなことは関係ない。弾が飛んでこようがそんなことも関係ないのです。兵隊は死んでもただの兵隊にすぎないのです。私と一緒に入った戦友が腹に弾丸に当たりました。私が「どうした！どうした！」と声をかけました。「ウー、ウー」とうなりながら「ヤラレター」と小さな声でつぶやくのです。「戦闘が収まったら衛生兵が助けに来るから辛抱しろよ！」といって私は前へ進みました。

ところが衛生兵だって弾丸が飛んでくる中をその場所まで行けません。そのうち

にどんどん出血して、戦闘が終わって衛生兵が駆けつけたときはもう手遅れなのです。最初はウー、ウーとうなっているがそのうちの声も出なくなります。私は何人かの戦友が負傷し、戦死した姿を見ましたが、まず「天皇陛下バンザイ！」と言って死ぬ人は一人もいません。私は聞いたこともない。「お父さん」ということもほとんど聞いていません。聞いているのは「おっかあ！」と「お母さん！」だけです。「お母さん！」といったらその人はもうお終いです。私は中国のあちこちを回って経験してきましたが、本当に「天皇陛下バンザイ」の声は一度も聞いたことはありません。みんな「お母さん！」です。それだけ母親の力は偉大だなあと思います。男はだめだなあ、と今でも思います。戦争というものはいやなものだなあ、と今もってしみじみと 생각합니다。戦争は男にしても女にしても絶対にやってはいけないと思います。皆さんもそのことを頭に入れておいてください。

総てを奪って

もう一つお話ししたいことがあります。田茂神の件ですが、私たちが軍隊でどんなことをやったのかについて若干申し上げます。昭和17年、18年、19年の3年間に私たちが参加した大きな作戦が3つあります。一つ目は**“綿花の収集作戦”**です。2つ目は**“小麦の収集作戦”**、3つ目は**“労働力の拉致事件”**です。

最初に綿花収集作戦ですが、綿花の収穫時期になると山東省地区は綿花の一大産地だったのです。一面に綿花が栽培されています。その時期になると腕章を着けた50人くらいの日本人が100人くらいの中国人労働者を連れて来るのです。腕章は三井物産の腕章です。それらの人たちと一緒に作戦行動に入ります。

部隊が部落に入ると綿花は山積みになっています。それを全部積み込みます。そしてどんどん運びます。本当に山のような綿花を牛車で車が入れるところまでどんどん運びます。それをさらに鉄道に乗せるところまで運びます。綿花の量たるものはたいへんな量です。この作戦は一個部隊で行うではありません。何個部隊も一斉に作戦に加わります。山東省の全部隊が一斉に行動します。そして総てを持ち去ります。一切残しません。

どこへ運ばれたのかは、私たちにはわかりません。まるで泥棒部隊です。その作戦が終わると、次は小麦の収奪作戦です。ところが小麦はなかなか表にはありません。どこにあるのかわからないのです。どうもおかしいなあ、と私たちは銃を手入れするための1本の針金を持っています。中国の家屋には土間があります。その土間を針金で刺します。するとどの場所も、1尺くらいの深さで止まります。小麦の収納袋に突き当たります。小麦が全部隠してありました。それを総て掘り返して、一軒も残らず全部持っていきます。それも1つや2つの部落ではないのです。総ての部落を全部です。

その次に何をやったかという**“人さらい”**です。当時日本国内では若い労働者はどんどん招集され、戦争に駆りだされて、労働力が足りません。そこで中国から捕虜を内地へ送りました。その捕虜をつくるために私たちは次は「うさぎ狩り」と

いう作戦を行いました。兵隊が一定の地域に大きな輪を作って取り囲み、その輪の中にいる中国人をみんな捕まえて貨車で送って、それを日本へ送り込んだのです。こういうことを私たちはやったのです。これを侵略と言わないでなんというのですか。人さらい、綿花のこぼり、小麦のこぼり、とみんな持って行くのです。これが侵略でなかったら何でしょうか。まさに泥棒です。我々の部隊は泥棒部隊です。これが現実です。私が一生懸命にそれをやってきたのですから。

その小麦や綿花はどこへ持っていったのか、捕虜たちはどこへ連れて行かれたのか、は私たちにはわからないのです。これが侵略でなかったら何でしょうか。私たちはまだ生きているのです。事実を証明しているのです。

司会：金子さんは今までもいろんなところで話されていますが、綿花や小麦のこぼりだけではなくて、たとえばそれを運ぶ牛ですが、見渡す限りといわれるように数え切れないほどの数の牛もまた全部日本軍が食用にしたり、革製品の材料にしたり、軍隊に用いられるのです。

考えてみれば農民たちがせっせと育てた農産物や食料や牛までも根こそぎ日本の軍隊が取り上げて、膨大な人口を要するその広大な地域の総ての生活手段を奪ってしまうのです。総てを奪われたあの人たちはたいへんだらうな、などとということは一切考えずに、考える必要もなかったのでしょうか。

それもずーっと、ずーっとあとになって撫順戦犯管理所で自ら犯してきた犯罪を反省して、ようやくそういえばあのとときの農民たちはどんな生活をしてきたのだろうか、飢えに苦しんだ農民も少なからず、そのことを考えると自分たちはたいへんなことをしてきたのだなあ、と反省せざるを得なかったわけです。たしかにその行為自体は、直接に農民を殺すという行為ではなかった。だが、総ての生活手段を奪われて大勢の人が餓死にまで至った、逆にそのような苦しみを与えてきた己の行為を深い反省に至ったのです。

なぜ兵隊が戦犯なのだ！

話を続けます。私たちはこのようにして人を殺したり、物を盗ったりして、私は5年間中国でこのような行為を行ってきました。そして8月15日の敗戦と同時に私たちはシベリアへ強制連行されて、ハバロフスクに連れて行かれました。そこから今度は「ダモイ」「ダモイ」とごまかされて、そこで5年間過ごしました。この5年間は本当に腹は減るわ、寒いわ、労働はキツイわ、という状態で死ぬか生きるかの瀬戸際で働かされてきました。そしてようやく日本へ帰れると思ったのですが、ハバロフスクへ連れて行かれて、ハバロフスクから今度もまた「ダモイ」「ダモイ」とウソをつかれて着いたところは中国でした。しかも戦犯として、でした。

シベリアであれだけ働かされて今度は戦犯です。私は自分の意志でやったことではないのです。総て命令だったのです。命令に従わなかったらどうなりますか。「お前はあの人を殺せ！」と命令されて、「できません」といったらどうなりますか。「上

官の命令は、すなわちこれが朕の命令なり」です。その命令に従わなければ軍法会議に回されて死刑にまでなるのです。

そして6年後の6月に裁判所に呼ばれました。私たちは「これでもうダメだ！」と覚悟していました。裁判長は330人の名前を読み上げました。そして言った。「起訴免除」と言ったのです。私たちはエッ！と思って、思わず唾を飲み込みました。「助かった！」と30男が、40男が、50男が、みんな声を上げて泣いたのです。5年間の軍隊生活、5年間のあの苦しいシベリア生活、6年間の管理所での生活を振り返って・・・これで日本へ帰れる、と本当に声を上げて泣きました。中国人民の寛大政策によってやっと日本へ帰ることができました。

日本へ帰ったら新聞記者はなんと言ったか。シベリアに5年間、中国に6年間、計11年間にも及ぶ抑留で、「洗脳されている」と言うのです。「洗脳」なんかされていませんよ、私たちは。「あいつら共産党の国にいたのだ」「赤の国にいたのだ」という。それを理由に帰国してからなかなか会社へも入れてくれません。1日でクビになった人もいます。私はそのうちの一人です。このようにして私たちは忠君愛国の精神で戦ってきた結果、こういうことになったのです。

こんな馬鹿な話がありますか。私たちを命令した最高指揮官の岡村寧次、土橋勇逸、私たちの師団長だった細川忠康、みんな帰ってきているのです。参謀もしかりです。私は兵隊ですよ。兵隊と下士官が戦犯なのです。命令に従った方が戦犯なのです。こんな馬鹿な話がありますか。私は、なんとしても腹が立って仕方ありません。私は赤だとか青だとかは関係ない。戦争だけは2度とやってはいけない。私はそういう信念で中国帰還者連絡会を組織して、現在までやっています。戦争は愛国心のために戦われるといわれますが、しかし戦争をするばかりが愛国心ではないのです。何が何でも戦争を防ぐことが立派な愛国心です。私はそのように考えています。どうか皆さん、そのことを十分理解していただきたいと思います。今後も、反戦・平和のためにぜひ戦っていきたく私は思っています。

熊谷 伸一郎著 税込¥1,890 出版：リトルモア

